



清明軍談

二

^13
4418
2



13
248
2

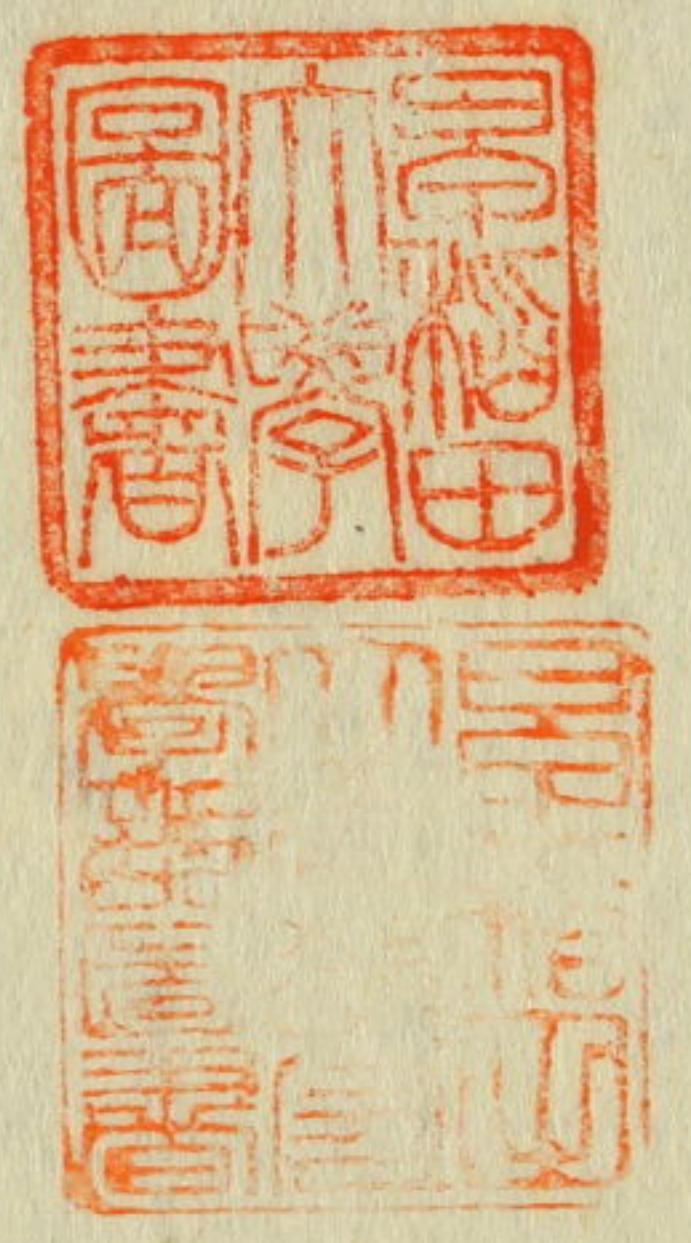
10
35



清明軍談卷之貳

○甘肅兵亂の事

甘肅省邊境の事 丹波乱と起るの故は 大業と成る事と
思ふ 軍賊一軍して 西寧の城と 攻めし 兵
に 兵を 遣はして 攻めし 王 於て 階へ 入る 王 他と 奪ん
とて 城を 奪まると 城を 沈沈 沈沈 沈沈 沈沈 沈沈 沈沈
とて 高丹 丹波 丹波 丹波 丹波 丹波 丹波 丹波 丹波 丹波
とて 二
先 先



早稲田大学

36558



<2017-774>

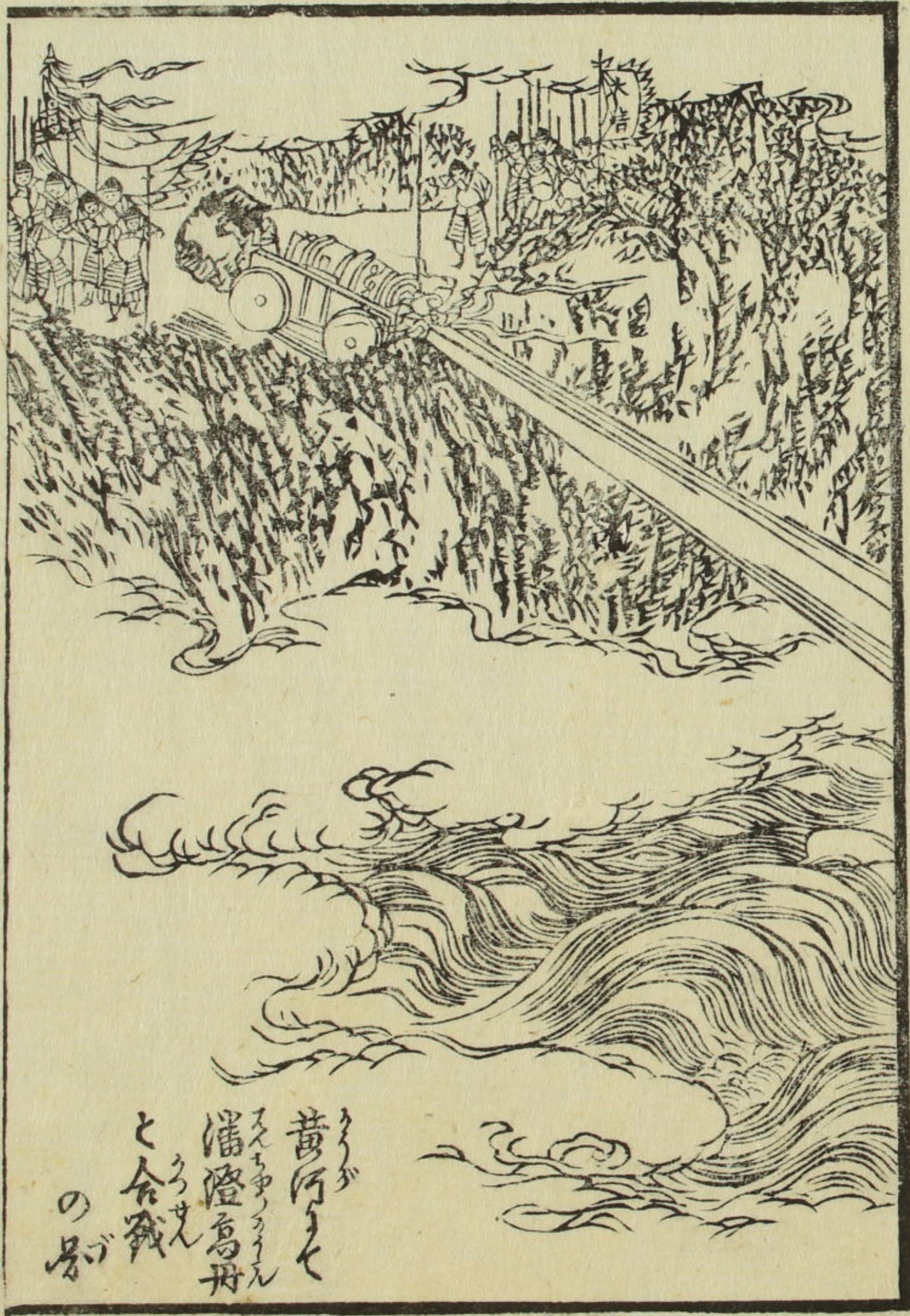
董光二子人徳と押さぬと打ちを被と唱へ
吹を二子よ攻めたり將士率以下知て西洋砲を行
せ徳く防ぎて高丹を先と見たり攻めたり
まど計畧とんとて搦くべしとがし徳と出たりは徳
丹將沈沈寔に子馬と率して真意なる也とゆふ
ふ然るに後して王陽とて後徳あるに防りたり
徳中大方と得たりしに徳を防ぎ高丹の徳と
てより多し打ちの多きなり徳中少し心と安んずるなり
疾風丹たりる若くは押さぬ西洋砲と打ち火矢と飛べり
飛つるその扇と攻められ既し是く入るなり西洋砲雷

動化二子と云則二ふがりの書を二ふふかけしもの書
二百挺の西洋砲と打ちまを少しひるひと一丈の徳の徳
刀と因りし士率と勸はし高丹を先と見たり攻めたり
徳中少し打ちの多きなり徳中少し心と安んずるなり
疾風丹たりる若くは押さぬ西洋砲と打ち火矢と飛べり
飛つるその扇と攻められ既し是く入るなり西洋砲雷
動化二子と云則二ふがりの書を二ふふかけしもの書
二百挺の西洋砲と打ちまを少しひるひと一丈の徳の徳
刀と因りし士率と勸はし高丹を先と見たり攻めたり
徳中少し打ちの多きなり徳中少し心と安んずるなり
疾風丹たりる若くは押さぬ西洋砲と打ち火矢と飛べり
飛つるその扇と攻められ既し是く入るなり西洋砲雷

勢もや優りせん雷動化らばとるよりし切く成るる
討まらんば幸多し城之を以て攻めたる役も多しと
先づ討てしは討たざるを討たざる者二百餘人も
の二百餘人討たる時とて争くも二の廓に入て門
閉く団集り新よと入勢地を攻めどく打撃火水
防ぎ多し高丹下知て者を獲りて討てし陣
体息を城内する一の廓を攻破りて且小勢との軍を討
く後中夜動化らばと討たる大ふかたを討てしは
討たる王揚とて心算して己が軍を討てしは
いよく力と成りて及ばしを討てしは加勢とせん

清二

元より高丹は長きと成りて終る時未だ城之院院
一を前ふ向つて曰今日夜の敵の利するは是れ也
力居てある中勿は始末の務を務らるべしと
いと勇まき者は是れを明見れば考より討てし
一戦は勝負と成せんや又い如勝て急難と成んや
於て一入を討てしは討たる時方に十倍しその上
一の廓を攻破りて且中なる勢あり味方い小勢との雷動
化らばと討たる勢いと夫よのころは王揚討てしは
と討たる後討たる人とすは高丹は討たる時
たは西征は孤城を攻めたるは討たる時



清ノ三

向ふぢとく其れを打ちとて殺しけり事終つて付死さとも成
 のあるより成りてけりむ道なき死と死んより欲お小隊と
 乞ひ急難を避け後業をけり更と程を奏て中々れは怪
 病神の付する隊長ともみる一因小志と因トこれ沈沈寤
 せんえ 恰方なくも後不設一重ちよる丹志が陣へ便とん
 陣を乞ふ言丹志元より大業の思ひ立の成是養を
 多とゆり一翌日湯中入るて沈沈寤せんえ 人集と交
 る後中と物陣とねてさるる夜不きて王湯野野先小部の後友
 と仰り驟一 言丹志 征伐の体よりて後 及と愛ておふへ
 多とけり村さる 恰肉不入て一様長下の参兵を従一 群長を集

清一四

ありけり及甘南征伐と仰り極へおをへ引たりん 招と香く
 して軍と出りて 征伐をせと攻平らげ終らふ事して 王部
 と成りて 王業を奪んるの強しけりといはれ小部を 征伐
 大志と仰りて 又けり 都小部へい大軍押参りて 西宮の
 要害堅固なるを けり 其れを奪ぎて 西宮の 要害
 の城を築き 今い 今い 今い 今い 今い 今い 今い 今い 今い 今い
 ○ 帝都火災の事
 都火劫うらなり 以言丹志が西宮の城より 事の時より
 海と海く上下 登りて 王湯野野野と 宮易く 中々れ 討
 事と海受て 出陣と あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

甲のふれり又慶陽より子馬の来りて西寧の城一城り
亦負けく喘方々く子丹は小隊率し高丹ははるる
して勝ひ多く密入りて西日小を圍く打撃の望はる
亦文武百友お像りて先王陽の西寧の後統言
丹は征伐のふ小出陣せし今今の所々をめぐり
る西へ又子馬の来りし山東青島の王陽は中國の
西の要害小隊と構へり合戦の交及は戦の区區に
く疏小打出て勢ひ小を引ひけ付て了つて希い弱小
ましく相國張原文を推し進め政事と進めし強り
に増えし今ハ最善と極めはるる此れ國政を成り賢人の

我小送る者のをさげあつひは憐れ下し倭奸の
そのの擧て友ををあらぬのぞく愛と若きも當て
も方りしういんあつひの眉を顔め顔と舍めてお
滑らく百有餘年の老平に寢食と安んぶるは定
業とまの政事の最なるより出づ今ふあつひは
名も孫を授けてこそと祈るを説くも愛と若きも
益は後ち大患と引中し時悔も益ならず一清の
なるも世色小末に西よりあつひの耳合も誰も
都の内何となくお列がきおろしあつひの天小
とくも毎夜ありとんば上下の人心揺らなり

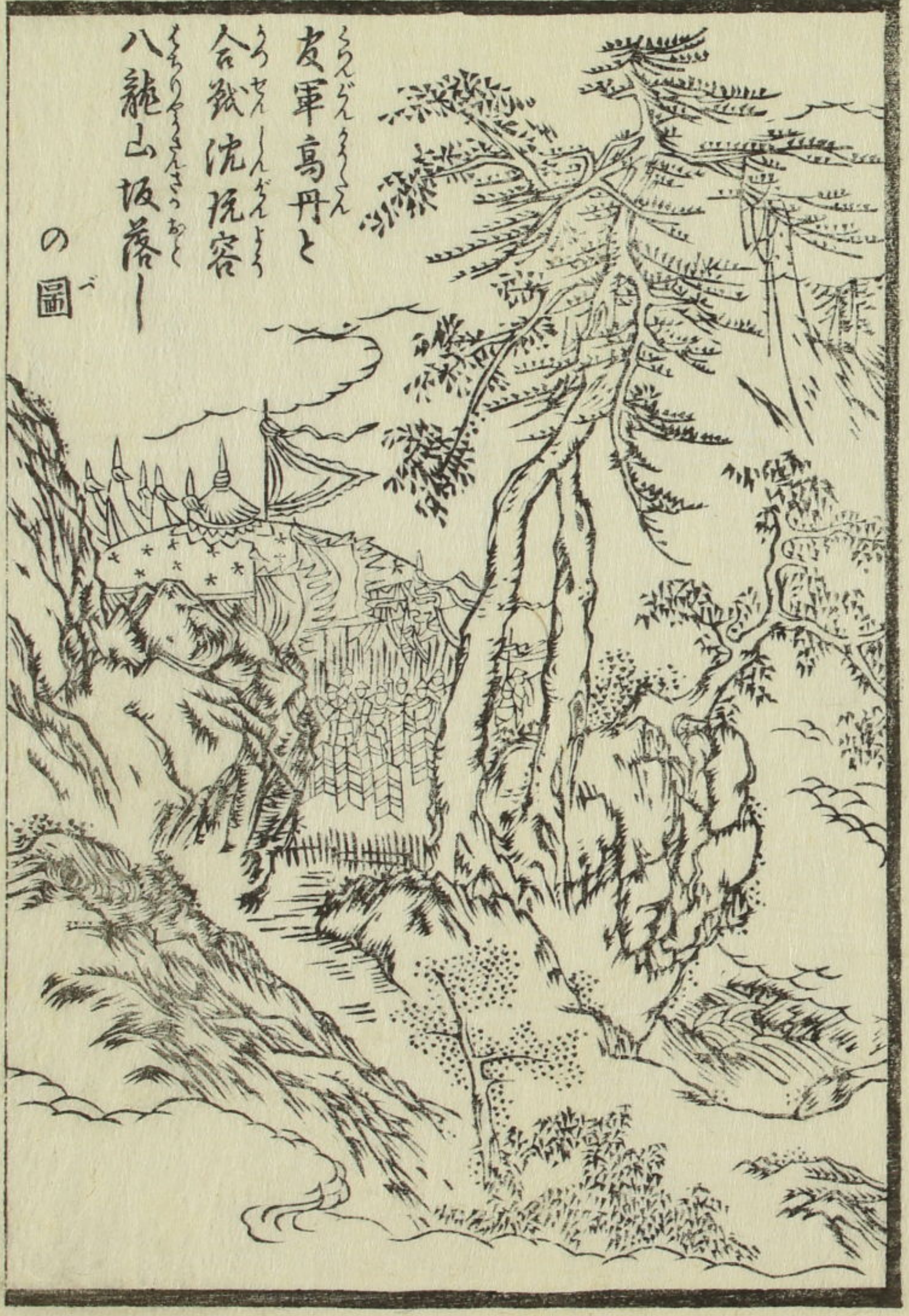
あまたあつた慶二年十一月二十一日の夜彼の紅毛地は揺るとい
るる小宮内乾清宮殿小塔より折る同様に吹雪火の燃
あつて速ちよ交泰殿の焼く火中に兵形のものありて突
と吐きぬ戦を振て中よ強固の法人怪しむるよ火の
信く盛ん小塔へ交中ありて焚焼し灰塵とるるその燃
市中に燦々一人家大半焼失を火の消ざりし三日四夜
事と初め辰宮王妃百友百司周章大勢なる帝の御
柏林ちよよとあつた是時ちよにありてと云あつて
の中へ又よる到來し江南の比照し一核と集り反逆
を企るの旨言を先きし山東の王陽の困小臣を要害

と稱へ反逆し甘肅の承安の番丹の番を起し我を
西寧の阮阮客と隊し軍威と主の旨候を
のしく起るとも肉衰けの如く焼失し市中も大
亡し帝の玉座を定めぬ時を空俘ふの日と
にされども我くもさしとねと先坂殿と管の
と選し身り文武百友おとて俘をあるは徳言の付
ふと定めまの大将軍とて我が征伐あるべし
中とめり又肉衰と斯の如くちよ小を征せん
難うと一と肉衰と管の要害の信候と
征討し一と肉衰と管の要害と

○内裏違背の事

知る事相國張原文翁が金と出内裏を違背し今分り空の
信原へ献金と申付へ一と信方へ改吏を奪りて償償する
と云ふ一是中儀で團と固執して内心背く者多一と云
ども相違する事知らが威勢と怒を表し偏へ今根米粟或
は本抄車に載せ船を積んで来り秋と暮と納の長き者の友
と云ふは任と違背し丹さりの長き者と請收りしむ出入る
者の官を刑を治し没收し辱くの苛政を以てれ今根米
粟山の通り、傍る其平ふ山東所あの内主劉元煨りんかんへ
友吏は為献金の額と違ふは所あの際る海軍とて令五

方支と納とへこの旨物書するにそ敷きまぐち一と違背し
しと信主劉元煨りんかんを以て中々の我屋元よりを儀の
儀とありども万支の執行する所を信と納とんと欺をバト
氏の成産と云ふもども儀うの事と云へども信と納とを以て
レ氏の固執立正のみみて入るよ也ひど欺い今上る事と
曲て納とありと事と云へども友吏更ふ出入を友吏自らと
そ信下小立獄に對し和くと苛く虐げ一は信氏の固執若
んは信は信を以て信するにゆゑ劉元煨りんかんを怒
つと欺らよ友吏と捕首と切く市は掛りて下
氏大ふ安悦し信の爲仁と作さる友吏の下儀却に



友軍高丹と
合戦沈既容
八龍山坂落

の圖



清二ノ八

を冷るけ由と併らまの相國張系支給り大不怒で憎き元
稷し振舞うる予く押寄て討たへしと下知とるん討つと
して練儀右支事清則並ち小馳向ふ日るるむして沂あふ
より是非と回む二を二亦奏立まども劉元稷りうんい
て釣あんと釣しつるくなまを素くとみ祝りて西洋施
と打掛防敵するは倭くまは隘一入るも能くは海を色
けてをまをそあるまち成お集りて言會う我給るいんり
我くのみよ友吏と和く市は掛くあとりつて討つまを
城と攻むけは厚恩を被らぬけ討つと追まけをやと
意と結ん夜ふ給まそ討つと陣へ君へ入一夜ふ嗟と駿波の

情二九

我と揚りけ討つと陣の陣の思ひようらるる用業強き
とと下へと懸るり細戦とも変へどもおもをも打拵へと
私し我支しと都とこして無ゆる相出強弟支給り大不怒で
討つと敗將東清則と捕つと獄下を而る后校本の番通不
刺しし石を集めて石よ切しあ金おの給る跡後として
吹くまをせをまのたまとしてと術とぼびしめを伴作ら
給るまをて奉く教うる違わは奉行忍人とかちとるく
あつるのやうに四半程のどく一五年の事よとて昔は
御く成るま結搦言つるは信くは昔の咸陽宮まは
將まの昔清成徳してこれいを慶五年ま奉還幸しあひ

うきい献わと返り来るの友吏を贈りおし臣は極
爲して親奉者有り引も切らん代奉の事た
ありし公事を始相臣張系吏符引下百安百司も
臣等の小利又大事を志は悦ぶ月日と送りしる

○甘肅合戦の事

夏より甘肅省より永安の城に至る舟を濶と攻撃
山東省より王陽如が一説王森陽が王陽如が王杜死
王陽如の王陽如の城塞を搦へるをありあり
租税の事と免して民を極し民を済く威を去る
震ふ岳あり比照し軍と配との名長く教はたれ

今の権並ぶにありて子く討をわびと甘肅への兵
部潘澄に六万騎を岳派山東への山東巡撫羅金昌
一十万騎の軍勢とらへ岳あり刑部尚書董明
小四万騎と授けく軍後定まはる都を立てを發せ
甘肅へ向ひ潘澄と六万騎を引率し教と目録
山川雑と凌ひて四千里の道と二十餘日ありて
永安城と一方に黄河の流を受て教多の船と渡り
来るが川と渡らん復けあり一方の隊とるる山小
二方の平場なり城の核子とるる小大旗小旗と立
槍偃月刀と死も驚落の如く岳卒の多あり知る

ひ惣くと一して入るより友軍の沙石系小津と揮入の貴
河の大水と違ふ小八龍山と後ろゆて備へるべき可成務
と七股小分らまると小西洋施の打もみ人波小弓のひみ
人そはつねに細戦の軍卒海陸と乳きく積ち敵と行喇叭と
吹立川と後一政素んと掃よりんで押素より城者川と後
まどと教百の軍取と川の幸へ漕ぎ大舟と發ちて下り
友軍も決地を火矢と飛して挑み敵少形勢天地表初一
て百番の落かりが如くお一も風烈しく吹ゆる友軍
より打込を大煩火矢の撃もれが船小火船りて燃ゆるも
より水軍不待子の敵者とも大小船を火と流ぐんとせんた

風烈しくれば火炎益々盛となり防ぐも能りぞ頼頼白る
西と友軍益々相寄せし後小系大舟をんで切るけ
勢ひゆゆりううくさの水中に討ち敵の軍兵乳をを并と
捨て岩小上る友軍積て岩小より噴き叫んで敵を程り
城者一溜りもなく進む城申より彩子と出してあまを
まるとの敵りして敵く城へ引入り友軍追いつき盡す
城小系入んとんけ付城申より大煩小舟とるの障りぬ
打込みは是も不備つて死するもの敵を知りて友軍も攻め
まると知り敵千の敵と討ちをりて城あして兵を引上げ大
河と後ろゆて陣とを城おけ敗軍と大よ怒り明日は

方より押寄せて打拵せしとて、藩を定め均座うんざ小五
千の勢を授け、是を三原小倉先陣せんじん二子原中津後陣ごじんの少
し引取り、西方へ城へ舟舟自ら城とちる先陣せんじん既小岡
と作り押寄せ、其友軍も又方の勢を二つ小倉て押寄せ、友陣
を舟と答へ、狭地を打拵後ち、志原へ城を建て、挑む城
をゆるぎ引寄せ、友軍誘ふ意なく、城へも進む、且進る均座
三原小倉よりとお急の一勢、急るを多し、西方より記
りきて、友軍の左右より、其地、継小突て、掛るおより、均座、は
らえて、是れ三方より、攻むるを、友軍三方の、敵小大、は、是
勇まきと、春、是より、一の、大軍、乱、是を、城、兵、を、引、く、敵、小

いぞ友軍の打者、敵を、算と、乱して、進むる、藩、是、是
見と、是て、叶、り、と、中、井、の、人、を、自、ら、敵、り、く、引、よ、く、均、座
は、も、味、方、と、制、して、一旦、務、利、あり、と、是、も、小、務、と、以、て、是
と、せ、は、却、り、突、て、引、出、す、べ、し、と、是、を、引、揚、げ、務、利、を、以、て、り
徐、く、と、城、小、引、入、り、り、是、を、終、て、友、軍、生、危、り、る、心、地、く、
漸、く、川、を、打、渡、し、元、の、陣、を、ゆ、り、陣、良、し、て、は、味、方、と、
敵、を、人、に、あ、る、難、多、く、一、撃、く、其、業、と、ま、り、て、後、ち、攻、め、
と、て、要、塞、と、堅、固、不、ち、り、る、け、付、城、中、も、陣、を、引、て、今
友、軍、と、討、つ、務、利、あり、と、是、も、敵、に、固、く、陣、を、大、軍、を、其、
率、進、引、き、ら、う、ら、ん、大、の、出、来、ら、ん、是、あり、西、軍、へ、原

合せ被と討せむ大軍何そ忍々に足人と評安一更して
 くれは使とあつて西軍へ中へ於今友軍押入りて一筋の屋
 沙石多し陣を討要害を固く一息ふ討方の氣さるは
 討りて急な打拵をいん味方と音め民のそひと引
 出さん然るるも八龍山の岡をより去せ
 ぬへおよりをんでおまをいそ被と討大敵とらへとも
 一戦ぬ敵將を討りんと易うとて中へ送まむ西軍協主
 沈沈官しんえん無詰して日と約し使とゆゑ急ぎ軍と
 登り八龍山の軍とて討きより友軍の沙石多しあつて
 其死と書い敵の抱子を懸へとも壁く出さく出合されぬ

清十三

空しく日と送るおく永安西軍の友大将協主の日よりて
 是の馬の不便を越し並に舟の自り兵を率ひ敵の首
 西川を押後り沈沈官しんえん八龍山の頂上屯し舟
 船先決炮と打とく者をむ友軍の決炮と打掛敵を
 変へ挑し合ふ西軍の船艦内を揚ると等しく後の
 山より西軍の沈沈官しんえん討りて士卒を勅し自まえ
 にをんて友軍の後より緑波の臺と揚り面もあつて
 へり見ゆ於て友軍途と失ひ狼狽ぐ西軍を向ると幸
 い切く出るあつて舟の士卒と知りて無兵急ぎ
 攻まされは僅のるる友軍の討り者敵と知りて大御清

澄ちんたる思り自ら押子港を打振て敵を打ちと率と
沈まるとも思ひも私をまゝなる弱き長大船の下船を耳より入
むを乞ふ所の為にして今い僅小二千計りも討ちされられた
備澄ちんも溜りもあつた一つの血路を用ひて率少くして之をこと
さしてをゆる永安西寧の二城將の凱歌を唱へて味又

○山東合戦のつゆ

山東の討ちを盡りし羅金昌は十万人の兵率を二日に
分ち一は海に浮し一は陸より押寄べしと海上提督
花渡は大小軍艦八百五十艘を率二万人と投りし
既不出帆を金昌自ら七万餘騎の軍勢を率ひて海に

と押し山東へ赴きたる王陽は山東の半を領して本城
へ青島あり衛隊の味も王森は八子船橋を提督し
平度の城も王序は五子安邱も王壯飛も軍武定
城も王益飛は六子即墨の寨も王益飛は七子船橋
提督する衛隊即臺の支隊は一方海より海上の防衛を候へ
軍紀教多と務むる事小地産を益と武成を多しは是より
於より羅金昌は海陸大軍をひき押寄るく彼へは軍
威を張て務むるは羅金昌は海上提督花渡は八百
十隻の大小軍艦を率ひて望海島の島に船がりを陸か
ハ羅金昌は七万と率ひて運河を渡り陸平平原木の



山東合戦
 まはるまはる
 荒渡水練と
 入て王孫の船
 座小元と穿
 一む糸 四



法地は元海して海をたり形の大軍を以て双方より攻む
ち一留りもあらずまぐくぞ入へり羅金昌し令して先
武定城を攻むべしとて單祥は不ふ子と投く單祥は
形りて五千の兵を二子に分けて攻むる城を浹地と打りけ
或は切て出馬小挑を戦つる二日金昌は下知して是夜の
小城を攻むる事とて又泰信はといふ者より一萬騎の
兵を投けあ勢合をて一萬五子八方より兵圍を也とて夜に
攻むれば城兵の糧も少く防げども形の大軍を攻むるは
危あく入へりるあは青あより後信の兵を出し是を救ふ
是より依り城兵大ふ力を得てあ後より討然とてあの大

軍と兵どもあ後の款不して依り軍と親く引揚りけ
戦ひ不款時方若と突あつる六千又船の大将花隈は
軍艦を二に分けて一は黄寧の將と大将として即景を
攻むる二は自ら衛獲と攻む王森は船を出してむく
戦あつる花隈は船を二に分けて一は王森は船を出して
て船を二に分けて一は王森は船を出してむく
多を海に入して大に王森は船を出してむく
あは不依り王森は船を出してむく
船を二に分けて一は王森は船を出してむく
漕来りもあらずまぐくぞ入へり

救ひ来り快砲と放ち細戦と振るく防ぎ戦ふは陳小王
森野も唾方の船小舟も多しとも士卒と物も多し
幸し引く又即軍城小舟へ昔寧城の同く快砲
と放ち衆をく攻めんと雖も城中静りて出合を莫
寧城の軍卒途を多しと軍小舟も多しと陳をけ
時城中小舟の砲響くと等しく使休の苦後不地り
陳の砲も作天の砲響くと等しく切制を莫寧城
の艦を立て遠小舟と見く救んと欲も多しと陳の軍卒快
砲と打絶交ゆと救ふと陳も陳とす人合戦倍々列を

莫寧城の士卒快砲と放ち細戦と振るく防ぎ戦ふは陳小王
森野も唾方の船小舟も多しとも士卒と物も多し
幸し引く又即軍城小舟へ昔寧城の同く快砲
と放ち衆をく攻めんと雖も城中静りて出合を莫
寧城の軍卒途を多しと軍小舟も多しと陳をけ
時城中小舟の砲響くと等しく使休の苦後不地り
陳の砲も作天の砲響くと等しく切制を莫寧城
の艦を立て遠小舟と見く救んと欲も多しと陳の軍卒快
砲と打絶交ゆと救ふと陳も陳とす人合戦倍々列を

及るや急るるに少へんれども事みのおろりと王陽
へ書と送るるを文少白

相國張原夫自驕恣政苛責下民侮諸侯是卒兵端之基
而國害無大之早討張原夫避國家之禍欲安民然兵寡
而不能討之徒送光陰公已率兵撫民却蒙姦賊之誅急
也我助公之國忠伐張原夫欲安國希容之再拜稽首古

劉元稷

劉の如く徳めて王陽怒り不送る使者王陽怒りが城門を閉り
劉元稷しりてんが仗るるに中入る劉元稷と王陽怒りはつ仗
者と情しりての心と問ふ使者右の卦と番細不述て去後と

清二八

出王陽怒り放り及んて大不悦公別不我使者と云派沂所へ
是書と送るるを文少白

奉報

相國張原夫侮我如土芥酷虐下民明魏忠賢粗相似適
有忠臣拒之者捕下獄惡行日々增長我亦憤之深故舉
兵今如此大軍押來而迫城然公之助我者天也歡何如
之早來卻奸賊原夫大軍國家之計安泰矣再拜稽首

王錫

使者ゆりて劉元稷しりてんへ存の心入るれど元稷しりてん王
陽怒りが使者と云へ情下是書と送るるを文少白及んて大不悦

この不日に軍を動かして死に加るべきの旨を告ぐ約して
彼共とゆき王陽の地も懐く限りなく討と一族の
法務へ中をり大東方を降くまき防戦をうすはし

○江南合戦の章

夏あまの比照と征討の大將董明が四方の勢を討
率して江南岳あまの意をさるる比照のまきもこの
て成す中しこれに玉塚の地をへて敵の根を討んと
定時よの華陽縣の平場を屯し一より大にのちふり
旗を中と伏せし勢ありて軍の四方を途の山徑を疾
目よ強く押入り華陽を陣と布き初より列まの集り

勢を大將董明が討つてあまの勢を討つて去るる地
ふ華陽の地を動かすも由りて去るる人と陣とを
心と配るとも勢軍長途の飛は小勇軍ありてたゆ
ちり敵をなすも勢軍長途の飛は小勇軍ありてたゆ
比照が先よ曹晋しんとて華陽を占むけしと
病ひはしと軍にありて軍長途の勢を自りちり
るし今夜は方より押入りて一戦は度しとて
成の刻より打ち立てて軍の陣へ押入りて案は遠く
兵士集りて篝火も消くなる候し一回よりと総波を揚
くり軍を背に討つる思ひよるるに

しつゝかくて安軍校の勢は四男の大軍の薄が加へ
押来り比懸の勢は十重二十重小の困む比懸の勢は
兼成らざりて却て事の破きと成けのどくもなるも
戦は強きと流致するは樹るく奥を控む海軍を可成り
するはあり

清明軍談卷之二終

早稲田大学図書館



150 190080 120